わが家の防火を考える

秋の火災予防運動　10月26日→11月1日

「消えたかな！気になるあの火、もう一度」をキャンペーンテーマに、今月26日から来月1日まで「秋の火災予防運動」が県下で展開されます。ところで火事はちょっとした不注意や気のゆるみから大惨事を招く、人災ですね。人災である以上、防止は可能。そうです、みなさん一人ひとりの意識が重要なポイントです。今号では、「わが家の防火」というテーマで小学生や主婦、事業所のみなさんから〈防火〉についての話をうかがいましたので、ご紹介しましょう。みなさんも、この機会にもう一度〝火の取り扱い〟に気のゆるみなどはないかチェックしてみてください。

三年生のときまでは蚊取り線香の点火も許可を得て

小林一彦くん
（和納小学校6年）

ぼくの家では、商売をしている関係で火を使うことが多く、そのため、火を使う場所には必ず消火器が設置してあります。とくに揚げ物をする調理場には、フラワー消火器という簡単で、消火力の強いものが備えてあります。また、ぼくの家では火に対して厳しく、夏に使う蚊取り線香も三年生のときまでは、許可をとってからでないと、つけてはいけないと口うるさく言われました。火事――というと連想するのは、荷物をかかえて人が逃げる姿が浮かびます。ぼくだったら、きっと、ランドセルを背負って逃げるんじゃないかな？でも家の人には荷物を出すように言われるかも知れませんね。

遊びに行くときは火の元を点検してから

丸山充裕くん
（和納小学校5年）

ぼくの家では、両親が昼間仕事でいないので、冬なんか、家に帰るとすぐこたつやファンヒーターをつけます。でも、おかあさんから温度が上がらないよう、こたつのふとんはきちんとかけておくようにいわれています。そのうえ、遊びに行くときには必ず、こたつやファンヒーターのスイッチを切って、点検してから遊びに行くようにしています。火事というと、まっ赤に燃える、というイメージがあります。とくに、ぼくのおばあちゃんの家が、隣の子供の火遊びで燃えたことがあるので、マッチやライターなど、火をつけるものは絶対にいたずらしないよう厳しく言われています。万一、火災にあった場合には命が一番大事だからすぐ逃げます。

一家の主婦として火の取り扱いには神経質

幸村由美子さん
（間瀬2区・主婦）

わたしは一家の主婦として、とくに火の取り扱いには注意しています。たとえば、揚げ物のような油料理をしているときには、電話が鳴ってもできるだけ出ないようにしています。どうしてもその場を離れるときには、必ず火を止めてから離れるようにしています。

はずかしい話ですが、以前、てんぷらを揚げているときに、ちょっと火を強くしすぎたのか、油の中に火が入ってヒヤリとしたことやストーブの上に干していた洗濯物が落ちて、危なく焼けそうになった経験があるものですから、それ以後、寝る前にはガスの元栓を確認したり、使った灰皿の下には燃えない物でガードを置くようにしています。

細かいところから火の元の注意を

中野由宏さん
（新谷・団体職員）

わたしのところでは、日中、留守にすることが多いので、出かける前にはガスの元栓を必ず締めてから出かけるようにしています。また寝る前には、火の元を点検し、最低でも二回は確認するようにしています。もちろん、寝たばこなんて最も危いことはやりません。とくに気を使っているのは、子供たちへの防火教育です。火のおそろしさは十分教えているつもりです。ところで、わたしは過去二回消火活動に協力しましたが、その活動の大変さは今さらながらに痛感しています。そのため、火災原因になりやすいガスホースの取り替えやガスふろがまのたき場はこまめにそうじをして、細かいところから火の元の注意をしています。

接客商売ですから火の元には最大の注意を

霜鳥一進さん
（ほてる大橋総務部長）

わたしどもは接客商売なので防火については最大の注意をはらっています。お客様が帰った直後はもちろん、約一時間後にも再確認をしています。また、おいでくださったお客様には、避難路を確実にお知らせしています。訓練も最低年二回以上はしています。とくに夜間の火災発生を想定した訓練では、集合をかけてからどれぐらいの時間で消火体制を整えられるかなども随時行っています。これらの避難訓練に併せ、従業員の消火活動の訓練も同時に行っています。ただ、事故がないと案外マンネリ化になりやすく、気がゆるむケースがあるため、抜き打ち的に従業員には消火器具の位置や種類などを質問して、常に防火に対する意識の高揚をはかっています。

患者さんの安全を保障するのがわたしたちの使命

近藤栄一さん
（岩室温泉病院課長）

坂井万三さん
（岩室温泉病院事務長）

病院という特殊施設であるため防火には細心の注意をはらっています。たとえば、患者のみなさんには病室での禁煙はもちろん、院内でも指定された場所以外ではたばこは吸わないよう指導しています。また各課に防火責任者を配置していますし、看護婦には午後五時前になると必ず各病室に防火を呼びかけるような体制づくりをしています。とくに、わたくしどもの病院には、お年寄りや体の不自由な人が多いため、〝火事は絶対に出してはならない〟という強い指導の下で各種の防火対策を講じています。そのため、常時、岩室消防分署と連絡を密にして、総合避難訓練などを実施しています。

ところで、過去に当院で寝たばこをして不始末を起こした患者さんがいましたが、即退院していただきました。ちょっとした不注意で他の人への安全をおびやかすこのような行為には厳しい態度で臨んでいます。

火災の早期発見者に聞く！

今年の八月二日午後五時ころ和納六区のAさん宅で作業所の二階の一部を焼く、ボヤ騒ぎがありました。これがボヤ程度ですんだのも早期発見と初期消火が功を奏した実例です。この火災の早期発見者と消火協力者に話をうかがってみました。

火災早期発見者

野沢一子さん（和納6区）

わたしが火事を見つけたのは、ちょうど隣（火元）の家のおばあちゃんと垣根越しに話をしているときでした。それですぐ、近所の人たちに「火事よ」と知らせ応援を求めました。もちろん、初期消火のためバケツリレーで消火にあたりましたが、消防署へ119番通報してほしいとのことで電話をかけました。隣の家は幸い早い発見で大したことはなく、ホッとしています。わたしもこのボヤ騒ぎを機に、自宅の火の取り扱いには気をつけています。

消火協力者

早川紀四勇さん（和納6区）

第一発見者の野沢さんが大声で「火事よ」と叫んだのを聞いて、すぐ現場にかけつけました。あたりは煙がたちこめ、火の勢いも強かったので、応援にかけつけた近所の人たちと協力してバケツリレーで消火にあたりました。それが功を奏したのでしょうか、時間的に十分くらいで火を消しとめることができました。しかし、念のため水道の蛇口にホースを接続しながら、消防署へ連絡してもらいました。幸い火事はボヤ程度で済みましたが、無我夢中だったため、後になって「火事は本当にこわいな」とつくづく感じました。そのためか、家のものが天ぷらを揚げるときやストーブをつけているときなど、十分すぎるほどの神経を使うようになりました。